

司式:吉田千鶴子
奏楽:山田 絵里

前奏:「マニフィカト」(H.シャイデマン)

招詞:神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。(ヨハ3:16a)

讚美歌 83「聖なるかな」

交読詩編 103:17-22

- 17 主の慈しみは世々としえに/主を畏れる人の上におり/恵みの御業は子らの子らに
18 主の契約を守る人/命令を心に留めて行く人に及ぶ。
19 主は天に御座を固く据え/主権をもってすべてを統治される。
20 御使いたちよ、主をたたえよ/主の語られる声を聞き/御言葉を成し遂げるものよ/力ある勇士たちよ。
21 主の万軍よ、主をたたえよ/御もとに仕え、御旨を果たすものよ。
22 主に造られたものはすべて、主をたたえよ/主の統治されるところの、どこにあっても。わたしの魂よ、主をたたえよ。

朗読聖書①申命記 10:17-22

◆神が求められること(後半)

- 17 あなたたちの神、主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして勇ましく畏るべき神、人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず、
18 孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。
19 あなたたちは寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であった。
20 あなたの神、主を畏れ、主に仕え、主につき従ってその御名によって誓いなさい。
21 この方こそ、あなたの賛美、あなたの神であり、あなたの目撃したこれらの大いなる恐るべきことをあなたのために行われた方である。
22 あなたの先祖は七十人でエジプトに下ったが、今や、あなたの神、主はあなたを天の星のように数多くされた。

朗読聖書②ルカによる福音書 9:43b-48

◆再び自分の死を予告する

- 43 イエスがなされたすべてのことに、皆が驚いていると、イエスは弟子たちに言われた。
44 「この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている。」
45 弟子たちはその言葉が分からなかった。彼らには理解できないように隠されていたのである。彼らは、怖くてその言葉について尋ねられなかった。

◆いちばん偉い者

- 46 弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた。
47 イエスは彼らの心の内を見抜き、一人の子供の手を取り、御自分のそばに立たせて、
48 言われた。「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがたの中で最も小さい者こそ、最も偉い者である。」

祈禱

愛と慈しみに富み給う主イエス・キリストをこの世にお遣わし下さった神さま、あなたの聖名を褒め称えます。

神さま、待降節第三主日の今日、あなたは一人ひとりに新しい朝^{あした}を備えてくださり、夫々の名を呼び、生活の場から召し出し、ライブ配信へと招き、この場に集めてくださいました。愛する兄弟姉妹と共に、あなたの

礼拝に与ることが許されますことを心より感謝致します。

今献げるこの礼拝が神さまご自身の栄光が表される礼拝となりますよう、御霊をもってこのところに臨んでくださいますように切に祈ります。

最愛の御子主イエスを罪深い私たちのためにこの世にお遣わしになり、救いの御業を完成させてくださった神さま。私たち一人ひとりを捉え、信仰をお与えくださっている神さま、あなたがこれほどまでに私たちを、深い愛で満たしてくださっていることに心より感謝いたします。けれども、過ぐる一週間、御言葉に押し出されて始めることが許されましたのに、御言葉に背くこと多く、愛に乏しい者であったことを御前に告白せざるを得ません。あなたの慈しみにより古いものを脱ぎ捨てさせ、私たちを新しい者へと造り替えて新しい命を得させてください。また、「あなたを主」と告白しようと準備をしている者を励まし、勇気づけてください。アドヴェントの時があなたによって祝福豊かな時となりますように、聖霊が望んでくださいますように、心より願います。

アドヴェントを迎え、教会は新たな一巡りの歩みをスタートさせました。振り返りますと、この数年、コロナ禍で人と人の距離をとること、また集まることや親しく交わることを制限されることを余儀なくされましたが、ようやく心配をせずに礼拝を守り、教会活動を進めることができるようになった一年でした。コロナ禍前まで当たり前許されていたことの大切さと、ありがたさを噛みしめました。そして神さまに導かれた100年に、喜びと感謝をもって記念する礼拝をお献げすることも許されました。心より感謝致します。さらなる新しい日々も、このようにあなたが示された神さまの豊かな恵みと慈しみと祝福を覚えつつ、あなたの御旨を聖書の御言葉から聞き、追い求める者の群れとして教会の歩みを進めることができるように為さしめてください。隣人との主にある交わりが神さまによって豊かに育まれる群れでありますように希います。

この世の創造主にして支配者であられる神さま、あなたによる平和を願い求めます。戦争や災害で社会的に弱く小さくされている方々に寄り添い、共にあなたのために働くことができるように為さしめてください。一人ひとりに出来ることを、どうぞ清かにお示しください。あなたの福音を宣べ伝えることができるように知恵と勇気をお与えください。

東日本大震災および福島第一原子力発電所事故により苦難を負われた方々のことを忘れることなく、命と環境を守るための支援の働きが、あなたの御心に適ったものになりますように、聖霊の導きとお支えがありますように祈ります。

愛に富み給う神さま、本日この礼拝を共に与ることができない兄弟姉妹をも、あなたの豊かな愛と御恵で満たしてください。私たち教会の肢々をあなたの愛によって一つとしてください。様々な困難を抱える者、深い悲しみの中にある者、孤独にされている者、病に苦しんでいる者、あなたの救いとお支えを必要としている全ての者に、あなたの慈しみと励ましと祝福がありますように、主の平安を祈ります。

神さま、今日この礼拝に与えられた説教者を感謝致します。牧者が聖霊により強められ、大胆にあなたの御言葉の取次ぎが語られますように。聴く私たちの心の目と耳を開かせてください。語られた御言葉が新しい糧となり、一人ひとりがあなたによって守られる1週間を過ごし、次週は主の御降誕をお祝いするために喜びをもって聖降誕祭礼拝に、礼拝堂に、また

ライブ配信で集うことができますように聖霊の導きを祈ります。

全てが主の御心になりますように。この祈りを主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌 208「主なる神よ、夜は去りぬ」

説教「最も小さい者」

鮎川健一

今朝はアドヴェント第三主日を迎えて、ロウソクの火もあと一つを待つに至りました。近年、気候変動にもまして世相が慌しく変わる中にありますが、いつの時も、神と人との関係は、天地創造以来、大きな課題となっています。その中で、救い主なる御子イエス・キリストを“まことの神にしてまことの神”と信じて歩む者は、真実なる神の御言葉によって、悔い改めと、なお前進してゆく希望が与えられています。教会暦においてこの期間、典礼色を重んじている教会では、敷布やロウソクの色に紫色を用いていますが、それは十字架へ向かわれた主に紫の衣を着せた、あの御受難の時を迎えるに至る受難節と同じように、信仰の服従、悔い改めの思いをもって、神からの約束の真理に従って歩む恵みに応える、そのことを想い起すものです。

そこで私たちは、アドヴェントの時にあっても常に主の十字架を思い起こしながら、その御苦しみを日々改めて心に刻みます。そして何よりも父なる神が、この世を愛され、「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため」(ヨハ3:16b)に、この世に御子を送られた、この神の恵みを心に刻み、神に感謝し、神を褒め称えます。そして主の十字架を覚え、自分の十字架を担いつつ主の道を歩むべくして仕える者として召され、そして主の平安の内にある神の国へと進んでいきます。

今朝の場面で、主イエスは二度目の受難予告を弟子たちにされました。しかし彼らはこの言葉の意味が判りませんでした。まただからとて、その意味を主に尋ねることもしませんでした。聖書には、「弟子たちが怖がったから」とあります。弟子たちは何を怖がっていたのでしょうか。46 節以下を見ると少し判るでしょう。「弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた。」とあります。弟子たちの心にあった一番の関心事は、「自分たちの中で一番偉いのは誰か」ということです。しかし主の思いは、まったく違っていました。主は少し前に「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(23 節)と言われました。十字架は、罪人が殺される時に公に曝される道具です。それならば、主が殺され、それも曝し者に、ならば自分たちも殺されてそうなると思ったが故に、弟子たちは怖くて主に深い意味を尋ねられなかったのです。

また弟子たちは、神の国もこの地上の国と同じに考えており、この地上にあって一番の大国、列強の国としか思っていなかったのです。この地上の国では、仕える者と仕えられる者があって、当然、仕えられる者が偉いとの常識からみれば、イスラエルの国を立て直してくださる主の弟子であればこそ、弟子たちは誰よりも偉くなり、誰よりも幸福感に満たされて、人々から仕えられる者になりたかった。しかし主によって立てられる神の国は、彼らの思いとはまったく違っていました。

主が「自分を捨てて我に従え。」と言われたのは、「他人と比べて自分の立場がどうこうという心の動きを捨てよ」と言われた、このことにも当てはまります。まさに主は、弟子たちが議論している時の心の内を見抜かれて、一人の子供

の手を取り、御自分のそばに立たせました。そしてこう言われました。「わたしの名のためにこの子どもを受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」と。「わたしの名のために」とありますから、それは、名はその人自身を指すものですから、これは主のために主ご自身が言われている、そこから、「主の御心に適うために」ということになります。ここで主が「子どもを受け入れる」と言われていますが、以前にもお伝えしましたように、この「子ども」というのは、単に小さくてかわいい無垢な代表というわけではありません。この時代、「子ども」というのは、「何も出来ない、力のない小さな者、何も知らない残虐な者の代表」としてありました。女性と同じく社会的な地位や数に数えられない者として扱われていたということになります。今でいえば——そうではないと思わられるかも知れませんが——“子どもの人権、存在尊重”などという発想は、この時代のユダヤにはまったくありません。だからとて今それが変えられているかと言えばさあならず、現在でもその感覚は色濃く残っていることは否めません。日本も似ています。「ほとんど一緒」と言ってもいいでしょう。そこで主は「受け入れる」という言い方をされていますが、これは積極的には、「罪ある者を招き、受け止める」という意味にあります。

私たちは毎週この場所で神を礼拝し神に仕える、という時間を献げています。因みに『礼拝』という言葉は英語では「サーヴィス(service)」と表現します。「仕える」ということです。まさに“神にサーヴィスをしている、サーヴィスする者”とされている。この“神に仕える”ということとは、“何も出来ない、世の中では軽んじられている小さな者を受け入れ、これに仕える”ということへと連動していくこととなります。そのことを思いますと、教会において重んじられる人たちは、子どもや高齢者、ハンディを背負った人、また病人ということが浮かぶでしょうけれども、だからとて、その人たちを甘やかし、何でも許して受け入れるものではありません。教会はそういう場所ではありません。弱者救済を履き違えていることとなります。キリスト教会にも秩序があり、決まり事がある、また節度を持つということもある、それがキリストに仕えるという意味にあって、一人ひとりに非常に厳しい志が求められているということです。そこにはたとえ子供でも、病者、高齢者でも同じで、老若男女問わず平等です。それこそ平等です。また起こらずして起こり得る事態に対する対応においては、事の不透明さ隠蔽工作や詐欺・搾取などあっては論外だということは“言わずもがな”です。この見方や受け止め方は、教会として信仰的にも教会制度的にも当たり前のことです。しかしこの世においては、皮肉にも生き残り作戦の手段や主義主張にあっては、これはむしろ強調され、「推奨される大いなる知恵」と称されていることは、そこかしこに見られます。事実、中世のキリスト教会の出来事のみならず、現代においても知る人ぞ知る教会の事態であり、牧師や信徒の中にもこのような主義主張が存在することも隠せません。私自身、特に神学生になってからの教会生活を思い起こしますと、今年で丁度 20 年になりますが、それ以来これまでのところ、このような事態に遭ってかなり精神的にも肉体的にも苦痛を強いられ、日常的な社会生活も追い込まれてきたこと多々あって現在を迎えています。様々なハラスメントを受けているということです。言うなれば、神に真実、また誠実に仕えるため、このような闇の事態に立ち向かうために、普遍なる真理の福音宣教を担う使命をもった教会が教会としてあるため、信徒として、牧師として正しくあり続けるための意味が自他共に問われ続けているということにもなります。そうでなければ、キリスト教会は単なる倫理・思想団体、また秘密結社で

あり、牧師は独裁的な社長や経営者として人を顎で使い、長老は権威をかざして命令・指導をし、教会学校の教師は自己満足の俄か教育者です。更には年功序列が教会の組織体系や信仰理念、人間関係にまでまかり通るならば、社会的地位や名誉を裏付けた学校歴、また経済格差において、“誰が偉いのか”“自分が誰よりも称えられたい”との想いから承認欲求を満たすため、他者を蹴落としながら生き残りに必至になる事態が常識化されます。

主イエスは、「あなたがたで最も小さい者こそ、最も偉いのである。」と推されました。ここに、「偉い」ということに対しての逆転があります。この世の秩序、評価・評判で現れる、この偉い、賢い、豊か、威風堂々などと呼ばれることが、神の国の秩序においては、人間の思いと同じではないということが示されます。

私たちはこの地上に命を与えられながら、イエス・キリストの救いの知らせ、福音の真理を受けた者として、神の国へと招かれ、まことの光の中を歩み始めた者です。何よりも神の国からの福音の光に照らし出されているのが、まことのキリスト教会という所です。

ここで具体的に譬として多くあげられますが、時間に限りもありますので、一つにします。私たちは、明治期からの宣教活動を受けて、長老教会の伝統にある教会に属していますが、“長老とは何か”、詳しいことは別の機会にしますが、簡潔には牧師も長老の一人ですが、長老とは別に年配者とか偉い人とか、尊敬するほど長きに亘る信仰歴によって測られるものではなく、“何よりも誰よりも神に仕え、教会に集う人々に仕える者”ということです。その最たる者が牧師であると言われるものですが、これも何も教会員にゴマを播ったり、ヘコヘコするのが牧師のつとめではありません。また長老やそのほかの人たちも教会にいるからということでもありません。尊敬に値するという評価にもなりません。“礼拝に仕える”ことが第一に重要であり、それは一つの目に見える「しるし」ということを考えますと、礼拝の司式であり、説教であり、聖餐式における配餐と言えます。そこで私たちの聖餐の守り方は、会衆が席に座って、長老たちがパンと杯を席に運んできます。これは世間で言う“給仕”の役割を長老がしています。正に先ほどの“サーヴィス”という言葉と同じこと、重なります。一般的にはそのイメージの方が多くも知れませんが。“給仕・サーヴィス”誰かに何か特別なことをする、非常に深い意味があります。教会の信仰において照らし合わせてみると重要な根幹を持っています。キリストの十字架は、言うなれば究極的なサーヴィスです。主は罪ある私たちに十字架の死をもって罪に死に、復活の命によって究極的な意味で仕えておられます。キリストに倣うべくしてある「仕える」ということは、私たちはより小さくなる者です。しかもそれは心底から難しいということにもあります。どんな人でも、どんな立場にあっても、少なからずプライドや優越感、劣等感をも含めて、どこかで邪魔をします。そこで「小さな者に仕える」ということを教えられると、最初は何か自分の心を偽って、無理してでも人に評価されるなら、社会で有利に立つならばと、心無くとも渋々するということが起こります。何故なら、それは自ら人に仕える者として、ましてや立場の低い者や——立場の低いということをどう見るかということですが——年下の者に助言を求め、仕えて生きるということ自体が、生まれつき自然な心の動きに全く逆らっているからです。初めから自発的に「仕える者となる」ことを積極的に自分から求めることはないからです。自分は常に教える立場であって、教えられる者ではないということだからでしょう。しかし“主イエスが言われるのだから、

やってみよう。世の中で軽んじられている人よりも小さくなって仕えてみよう。”、そういう心が湧いてくるかもしれません。そう思って一步を踏み出してみる。そうする中で次第に実感・体感と共に判るようになってきます。神、キリストにあつては、他人と自分を比べるという心の動きが無意味で、そのような生き方を守り続ける理由がなく、神にあつて自由にされているということが何よりも大切なこと、重要だと気づかされるものです。そしてそれは、我が行くべき道をひたすら歩むことから、主イエスと共に自分が主の道を歩んでいるということの確かな喜び、実感・体感が浮かんでくるというものです。何よりも変えたい信仰者ならではの恵みがここにあります。

主イエスは弟子たちに「あなたがたには世で苦難がある」(ヨハ 16:33)と諭しました。旧約の時代から言われてきたように、預言者イザヤが記したことも浮かびます。

闇の中を歩む民は、大いなる光を見、
死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。
あなたは深い喜びと

大きな楽しみをお与えになり、
人々は御前に喜び祝った。(イザ9:1-2)

神の祝福をこのように告知したように、暗闇と死の陰に意気消沈していた私たちに、十字架によるキリストの救いの光が射し込み照らし出しました。私たちも主を信じる者とされて以来、イスラエルの民が導かれたように、キリストの光に照らし出され、アドヴェント第三主日、ロウソクの灯し火を見つめつつ、神からの恵みを受け止め直すものです。そして悔い改めの祈りをもって、なお主の民として相応しく、救いの道に招かれた者として、神に仕える者、最も小さい者として、この真実なる救いの光の中で、生涯、主の御前に誠実に歩んで参りたいと心から願います。

祈りを献げます。

常に近くにいまし給う御子イエス・キリストの父なる御神さま、日々与えられる恵みに感謝致します。その中にあつても、いまだ続くこの世の罪を、赦し、清め、主の御業が成し遂げられますように。

主の御降誕を記念する日を迎えるに相応しく、なお備えの時として顧み整えさせてください。信仰に信仰を重ね、上よりの力により頼みつつ、歩めますように、御霊の助けを願います。

今この時に、主にある平和を願いつつ、礼拝を献げている諸教会の上に、また祈りを献げておられる一人ひとりにも、上よりの祝福が満ち溢れますように。

御心を求めるすべての祈りに合わせ、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。

讚美歌 241「来たりたまえわれらの主」

献金・感謝・主の祈り(中川信明)

イエス・キリストの父なる神さま、待降節第三主日に、この礼拝堂に集められ、また、ライブ配信を通して共に礼拝を、守ることができましたことを感謝致します。

今日も、鮎川先生の口を通して『ルカによる福音書』9章の御言葉の説き明かしを聞きました。私たちがこれから礼拝に仕え、主に仕え、そして、小さき者たちに仕える者となれますように、あなたがいつも先に立って歩

んでくださり、私たちが従っていくことができますように、どうかお導きをお願い致します。

世界を見渡しますとアドヴェントを迎えている状況にあるにも拘らず、平和が脅かされている状況が続いておりますが、どうかあなたが、この世に光を照らしてくださり、平和を行き直らせてくださいますように。そして人々の苦しみを少しでも和らげてくださいますようお願い致します。

私たちは日々の生活の中で多くの者を与えられておりますが、そのほんの一部を感謝の徴としてお献げ致します。どうか教会の御用のためにお使ください。

私たち、この週もあなたによって守られ、歩み、そして来週には共にクリスマス礼拝を祝うことができますように、どうかお導きお願い致します。

『主の祈り』を共に祈り、この週の初めの一步とさせていただきます。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌：89「共にいてください」

派遣・主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたが一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告：特記無し。

後奏：「高く戸を上げよ」(M.レーガー)